

研究所活動報告 (2008 年度)

【講演会・公開講座等の活動】

『マイク・ハッカビー氏記念講演会 グローバルな社会に向けて 期待される若者像と教育の係わり方』

日時：2008 年 6 月 20 日(金) 午後 3 時 10 分～4 時 40 分

場所：本学 4-101 教室

講師：マイク・ハッカビー・米国アーカンソー州前知事、キリスト教福音派
南部バプティスト教会の牧師

司会：阪田恭代・本学国際コミュニケーション学科教授

マイク・ハッカビー氏 (Mike Huckabee) は、2008 年のアメリカ大統領選挙において共和党から立候補し、予備選序盤では宗教保守派 (religious right) の支持を得て、ジョン・マケイン候補を凌ぐ勢いを持っていた。保守中道派のマケイン氏が 8 月末の共和党全国党大会でサラ・ペイリン女史とともに大統領・副大統領候補に指名されるまで、ハッカビー氏は共和党内きっての保守派として副大統領候補の有力な一角を占めていた。ハッカビー氏は、アーカンソー州ホープ出身 (1955 年生まれ) で、96 年から 10 年半ほどアーカンソー州知事を務めたが、それ以前に南部バプティスト教会の牧師をしていたこともあり、妊娠中絶や同性婚には反対の立場を取る。また米国 FOX テレビのコメンテーターや自前のバンドでベースギターを演奏するなど、異色の

マルチタレントでもある。

講演会当日は、400 人を超える聴衆が教室を埋め尽くし、教室に入りきれない多くの学生たちは入り口でハッカビー氏を待ち、写真を撮りたい、話をしたい、と会場周辺は熱気であふれた。最初に司会の阪田教授から赤澤正人学長と高杉忠明研究所長の紹介があり、続いて高杉所長から国際社会研究所（国際問題研究所）開設の意義とその記念講演会である旨のスピーチがあった。そして最後にハッカビー氏のプロフィールが紹介された。

講演内容の要点は下記の通り。

1. 知事時代の経験から得たこと。

大統領や知事など行政機関の長は、普通の政治家と異なり、あらゆる分野の問題に精通していなければならない。教育、貿易、外交など広い分野に係わってきた経験が大統領選挙に出馬する際に役だった。また教育、インフラ、健康問題、税制、犯罪など多くの問題が相互に関係しているということを見渡す機会にもなった。

2. 教育には創造性が求められる。

アメリカでは毎日 6000 人の学生が落第し、多くの学生が高校を卒業できないでいる。テクノロジーは日々進歩するので、今日学んだ新しい技術は明日には古くなる。学校制度は学生のためのものであり、これから生きていく上で必要な道具の使い方を学ぶべきである。理科や数学の教科は大事だが、演劇や音楽、その他のことも重要だ。子どもたちから創造的なことを取り上げてしまってはならない。創造的な人間がいなければ、この世は大変退屈になってしまう。たとえば音楽はチームプレーを教えてくれるだけでなく、人前で緊張しないでいることの大切さも教えてくれる。私が大統領選挙に出馬できたのも、子どもの頃にギターを買ってもらい、練習して舞台上に立つようになったからだ。

3. 医療制度（ヘルスケア）について。

子どもの肥満や糖尿病は深刻な問題である。かつては大人の病気だったタイプ2糖尿病に、最近では7才から罹る子どももいる。そうなると50才までに死亡する人も多い。アメリカでは医療費の80%が慢性疾患の治療に充てられている状況だ。過食、運動不足、喫煙がアメリカ人の健康危機を促進している。アメリカのGDPの17%に相当する金額がヘルスケアに投じられているが、現行の制度では全員をカバーできず問題である。予防医療にもっと力を入れるべきだ。

4. 良い政府とは、どのような政府か。

財産やさまざまな属性によって差別されることなく、すべての人が平等に扱われるべきだ。また政治家は国民に奉仕する人間でなければならない。権力者による統治ではなく、国民自らが政治をコントロールし方向付ける自治政府（self-government）が最も良い政府である。「人にしてもらいたいことを人にもする」（注：『新約聖書』、マタイによる福音書、ルカによる福音書）が政治家としての私の信念である。国民がみなそのようになれば、政府に支持されるまでもない。良い政府は良い国民が創り出すものである。

講演の後の質疑応答では、20人を超える学生から次のような質問があった。

- i 京都大学の幹細胞開発について、モラルに反していると思うか。
- ii アメリカの軍隊についての見解。
- iii 移民流入はアメリカの伝統的価値観を壊すのではないか。
- iv 銃規制に反対する根拠。
- v 死刑制度はキリスト教に反していないか。
- vi CO₂排出最多国の1つであるアメリカは京都議定書に批准しなかったが、アメリカは何か対策を取るべきだと思うか。

- vii 同性愛者についての見解。
- viii 肥満は人々の経済や社会レベルと関連しているか。
- ix ハッカビー氏にとって平和とは何か。

紙面の関係でこれらの質問についての回答は記述できないが、質問に答えるハッカビー氏の真摯な態度は印象的だった。

講演会終了後、学生食堂ラパスにてレセプションが行われた。神田外語大学の SWING GANG JAZZ 研究会のセッションにベースギターを抱えて参加したハッカビー氏は、ボーカルの学生に顔を近づけ、ロックの名曲「Born to Be Wild（ワイルドで行こう）」を熱演した。最後に、会場の参加者一同で「アメージング・グレース」を合唱した。

ちなみにハッカビー講演会の様子は、2008 年 6 月 21 日の読売新聞に掲載された。

（佐々木、飯島、高杉）

『在日ブラジル人の本音 ～ ブラジル移民 100 周年を迎えて』

日時：2008 年 6 月 23 日（月）午後 5 時～6 時 30 分

場所：本学 2-301 教室

講師：アンジェロ・イシ（Angelo Ishi）・武蔵大学社会学部准教授

司会：高木耕・本学国際言語文化学科専任講師

2008 年は日系ブラジル移民 100 周年に当たり、ブラジル出身の移民研究者・アンジェロ・イシ氏による在日ブラジル人についての講演会が開催された。参加者は 150 名以上であった。

在日ブラジル人は 30 万人を数え、特にここ数年日本のブラジル人社会は急速に発展・成熟しているが、実態が十分に理解されているとは言い難い。普通に暮らす普通の人々であるにも拘らず、「移民問題」として論じられることが多いのはなぜなのか。在日ブラジル人社会を「悩みの種」ではなく「人材の宝庫」としてとらえ直すには、「たまたま生まれた所が違うだけ」と考え、地域社会における「心の壁」を取り払うことが重要である。

講演内容（抜粋）

1. はじめに

今年は日本ブラジル移民 100 周年！ / 神戸と横浜での記念イベント / なぜ、「ミスコンテスト」がこれほどまでに盛り上がるのか。その意義と役割 / 名古屋の「エキスポ・ビジネス」：元気のいいブラジル人の経済活動と社会活動 / グリーンとイエローのサッカー・ユニフォームを纏った達磨が意味するもの

2. 在日ブラジル人を理解しよう

「在日ブラジル人一世」宣言 / 『Alternativa』150 号の表紙 / 永住許可希望者の急増 / 日本で生きる約 30 万人のブラジル人 / キーワードは「階級」/ 「日系」ファクター：移民の子孫 / プライドが傷つく理由 / 入国管理法改正：合法的に滞在できることはとても重要 / 全国に散らばっていてもみんなメディアでつながっている / 「法の壁」よりも「心の壁」崩しを訴えるのがブラジル流？ / 14 才日系ブラジル人少年リンチ殺人事件：エルクラノ事件 / ブラジルについての記事・番組は「犯罪・アマゾン・カーニバル・サッカー」ばかり

3. 新しい世代が変えていく社会

内向きの発言から外向きの主張へ / TEN SAIS MC'S: バイリンガ

ル、バイカルチュラル / 多国籍音楽を通じて「共生」の可能性を
体現？ / NO BORDER 在日外国人の円卓会議 / 在日外国人は「悩
みの種」なのか「人材の宝庫なのか」：発想の転換が必要 / NHK
名古屋のポルトガル語サイト開設 / エスニック・コミュニティの
集団イメージをどう守るか―「品格あるブラジル人」を PR する
「在日ブラジル人による意識啓発キャンペーン

（飯島、高杉）

『テレビ国際放送はどのようにつくられるのかー英語ニュースの現場から』

日時：2008 年 6 月 26 日（木）午後 5 時～7 時

場所：本学 2-301 教室

講師：磯部慎一・NHK（日本放送協会）国際放送局制作センター・チーフ
ディレクター

司会：阪田恭代・本学国際コミュニケーション学科教授

下記は、神田外語大学 M-ステ（KUIS Media Station）の学生が、研究所の
協力を得て、講演ならびに講師に取材した内容である。2008 年度の M-ス
テ WEB サイト<<http://www.media-sta.jp>>に掲載されたものを、許可を得て、
以下に転載した。

（阪田）

KUIS M-ステーション ルポ&インタビュー（2008 年度）

NHK 国際放送局講演「テレビ国際放送はどのようにつくられるのかー英語

ニュースの現場から～」

取材担当：来間さやか（国際言語文化学科 1 年）、三石健介（国際言語文化学科 1 年）、山口菜摘（国際言語文化学科 4 年）

<注目される「国際放送」！>

2008 年 6 月 26 日(木)、NHK 国際放送局制作センター・チーフディレクター（英語ニュース担当）の磯部慎一さんが本校にて講演を行いました。本講演会は、本学の国際社会研究所、英米語学科、国際コミュニケーション学科の共催で実現しました。

NHK 国際放送局は、国内放送と違って、世界の人々を対象に、国内外のニュースを伝え、日本の立場や主張なども発信していきます。いわゆるニュースだけではなく、日本の暮らしや文化なども放送内容に盛り込み、世界各国との相互理解を深め、友好親善と文化交流を促進しています。

国際放送は、最近ますます注目されています。グローバル化が進む中、主要国のメディアは海外向けの情報発信に力を入れ、日本もその例外ではありません。NHK 国際放送局でも来年から渋谷に新たなスタジオを作り、国際放送をさらに強化しています。

海外向けのニュースはいったいどのようにつくられているのか？ 制作に携わる人材には何が求められているのか？ 番組制作の裏話も含め、貴重な話を KUIS の学生とシェアしてくれました。

以下、磯部さんの講演とともに、M-ステとの独占インタビューの内容も含めて、レポートします。

<英語ニュースはどのようにつくられるのか？>

NHK 国際放送局では、英語で情報を発信しています。どのようにして番

組がつくられるのか、「NEWS TODAY」という 30 分の番組を例に、貴重な現場写真とともに磯部さんは紹介してくれました。

日本語を英語に：

日本各地のニュースや世界のニュースが NHK の情報局を通じて国際放送局に入ります。その情報は日本語なので英文にしていする必要があります。まず、Writing の担当者が日本語の記事を英語に直します。英語になった原稿を、翻訳者やネイティブスタッフ、編集者、チーフなど複数でスペルミスなどの間違いがないかを確認します。原稿は次にネイティブのスタッフに回されます。ネイティブスタッフと翻訳者が話し合いながら、原稿の中の表現が強いところをもっと柔らかくしたり、逆に弱いところを強くしたりと工夫します。そうして出来上がった原稿をまた複数で確認し、ようやく英語の原稿が出来上がります。

日本向けニュースを海外向けに：

NHK 国際放送局のスタッフは、日本語の記事をそのまま訳して放送しているわけではないのです。彼らは常に、日本のニュースをそのまま海外に流していいのだろうか、日本で伝えられた国際ニュースをどのように海外に伝えればよいのか、ということを考えています。日本のニュースをそのまま流しても、日本のことをあまり知らない外国の人々にはそれがなぜニュースになっているのかわからないのです。国際ニュースにするならば、世界の中で日本はどのような立場にいるのかを伝えなければなりません。事実関係をしっかりと伝え、なおかつ、問題などを指摘し、公平にニュースを伝えなければなりません。ニュースは、常に、誰に向けて、何を伝えたいのかを考えなければならないわけです。

「ニュースも商品」！ ニュースづくりはチームワーク！：

「ニュースも商品である」と礒部さんは言います。人に見られるニュースでなければなりません。膨大な情報の中からニュースをつくり、それを正確かつ迅速に伝える。しかし、短い時間の中で、何を、どのように伝えるかについては、複数の目から意見を出し合い、1つの答えを出していく必要があります。そのため、ニュース作りにはスタッフ同士のコミュニケーションが大切なのです。また、放送ニュースだから映像は必須です。グラフィック専門のスタッフに何を伝えたいのかを理解してもらい、番組で必要な図やグラフを作り、どのように見出しをつけるかも考えて、ニュース映像をつくっていきます。

このように、国際放送局の現場では、記者、通訳、編集、キャスター、技術など、様々な専門分野の人々が協力して番組を作成します。「現場ではチームワークが大切なのです」という礒部さんの言葉が印象に残りました。

<礒部さんとの独占インタビュー>

講演後、M-ステのインタビューにも答えていただきました。

M-ステ：学生時代に学生は何をすべきでしょうか？

礒部さん：いろいろな経験をしてほしい。それは、サークルで活動したりするのでもいいし、勉強するのもよし。大事なのは、どんな経験でもいいから、そこから物の考え方を学んだり、出会った人からいろんなものを吸収したりしていろんなことを考えること。そして、人との出会いは大切にしてほしい。それから、体力をつけることだね(笑)。絶対体力と気力は必要だね。

Mーステ：講演中にも、仕事では体力と精神力が必要だとおっしゃっていましたが、今までで一番つらかった時は、いつですか？

礒部さん：やはり、始めたばかりの時だね。雪が降っている中おまわりさんを待ったりしたからね。あとは、カンボジアに行った時かな。戦車が鉄砲撃ち放題の中で情報をかき集めた時もあったよ。死んだら意味ないから、自分の身を守りながら情報を集めるのは本当に大変だよ。それから、デスクの担当になると大変だよ。ほとんどもう局に住んでいる状態だね(笑)。他の放送局にある情報がこちらになかったりすると夜中でも電話がかかってきて確認しなきゃならなかったりするからね。

Mーステ：先進国では、海外に向けてすでに情報を発信していて、NHK 国際情報局でも来年から本格的に行うようですが、他国に見習えることって何かありますか？

礒部さん：うん、あると思うよ。たとえば、イギリスの“BBC World”なんかは、グラフィック技術がすごいし、中東の放送局、“アルジャジーラ”っていうところは、お金をいっぱい持っているけど、それを戦略にして有効に使っているしね。

Mーステ：日本の放送局に求められているものって何ですか？

礒部さん：世界に発信することに関して言えば、正確に迅速に情報を淡々と伝えることだね。あとは、取材する時に、通訳を通さなくて取材ができると英語の記事がそのままできるわけだから、より

早く情報が伝えられるようになれるからいいよね。

Mーステ：最後に本学の学生へ何かメッセージを送ってください。

磯部さん：この大学で学んでいる人々はとても恵まれた環境にいます。勉強以外にも大いに先生や学校を利用して、いろんなことを経験して様々なことを考えてください。そして、人との出会いを大切にしてください。将来と直接関係ないと思えることもあるかもしれないけれども、いずれそれがあなたたちの財産になります。それから、何よりも「気力」と「体力」をつけてください。

<記者後記>

今回、マスコミのプロの方の話を直接聞くことができ、とても勉強になりました。インタビューでは、私達のおぼつかない質問に対しても親身になって回答やアドバイスをしてくださり、楽しく取材をさせていただきました。今回の講演やインタビューを通して、情報を発信する者としての責任を改めて痛感しました。今後のMーステの活動にも活かしていきます。磯部さん、ありがとうございました。

『公開講座 北京五輪とチベット問題』

日時：2008 年 7 月 2 日(水) 午後 6 時 30 分～8 時

場所：本学 2-301 教室

講師：興梠一郎・本学中国語学科教授 「チベット暴動とは何だったのか」

松本高明・本学非常勤講師 「中国の大国化とチベットとの共生への展望」

司会：永井浩・本学国際言語文化学科教授

2008 年 8 月 8 日から開催された北京オリンピックの熱戦に世界の目は釘付けになった。しかし、その一方で聖火リレーの先々で発生した「チベット暴動」に対する中国政府の弾圧ぶりや政府のお先棒を担ぐ一般中国人のナショナリスティックな行動は、あまりメディアで報道されることはなかった。国際世論が指摘したチベットの諸問題は、現在も未解決のままであり、オリンピック終了後も独立を目指すチベットとそれを認めない中国との攻防は続くであろう。チベット問題について今何が問われているのかをあらためて検証し、我々がどのようにこの問題を受け止めたらいいかについて考えるために、本講演会は開催された。

講演内容

はじめに

中国とドライの直接対話 その構図と歴史的経緯

チベット亡命人社会の持つ構図 / 中国の政権基盤とチベット政策
(なぜ中国政府はチベットに固執するのか?)

1. ラサ暴動（2008 年 3 月）の持つ意義とは？

地理的概念 「大チベット」と「行政区画『西藏』」

これまで中国・チベット双方が曖昧にしてきた概念が明確に
「暴動」の波及が意味するもの

騒憂罪で抑えられなかった中国政府当局、そして国内外への影響

2. 中国にとってのチベットとは？

「中華世界」から「国民国家中国」へ

チベット問題の淵源を国際政治学的観点から見ると中国側にも言い分はある。またチベット側にも…

(「独立」は所与のものではなく、「選択」できるもの)

3. チベットにとっての現代中国とは？

「近代化」目指す中国が直面する「統合」という課題

改革開放、「西部大開発」による国家市場の拡大がもたらすもの /
「愛国主義教育」そしてナショナリズムの勃興 / 「近代化政党」と
しての中国共産党

(露わになる「少数民族政策における認識上の『二重基準』」)

おわりに

中国とチベットの共生は可能か？ …カム地方の一例から

(アイデンティティは重なり合うことも可能では？)

「独立」と「人権」は不可分か？ …チベット人らしく生きられる社会
の構築

ロードマップを示すべし、そして惹き付ける工夫をせよ

【社会貢献活動】

『千葉市民文化大学レクチャー・シリーズ：2008 年アメリカ大統領選挙をどう読み解くか？—21 世紀型選挙と世界の目』

日時：2008 年 9 月 24 日(水)から 6 回シリーズ

毎週水曜日 午後 6 時半～8 時半

場所：千葉市民文化センター 5 階セミナー室

コーディネーター：高杉忠明・本学英米語学科教授

2008 年 11 月に行われたアメリカ大統領選挙に先立ち、大統領選挙につい

て本学の教員を中心にレクチャー・シリーズを開催した。今回の大統領選挙は「21 世紀型選挙」と呼ぶにふさわしい特徴が見て取れる。インターネットを駆使して草の根レベルのエネルギーを吸い上げ、国民の参加意識を高め、爆発的な資金とパワーを生み出したため、選挙資金の額、動員人員数共に記録的な数字に達した。特にオバマ陣営の選挙運動に参加したボランティアの活動やネットを経由した小口献金の爆発的増加に、その特徴がはっきり現れている。草の根レベルの選挙活動は、特殊利益の実現をはかる大企業の力をも資金面で圧倒した。さらに YouTube を通じて各候補のスピーチが何千万回も視聴され、大きな効果をもたらした。2008 年の選挙は、「ネット・ポリティクス」が名実ともに動き出した選挙であった。

このレクチャー・シリーズでは、前半にアメリカ国内の政治・経済事情を踏まえつつ選挙の特徴を分析し、後半では世界各国・各地域がこの選挙をどのように見、その結果が世界にどのような影響をもたらすか、について整理・分析して受講者と共に考察した。

なお、このレクチャー・シリーズは大統領選挙終了後の 12 月 4 日に神田外語大学の学生向けにも行われた。

1. 9 月 24 日 高杉忠明（本学英米語学科教授）
2008 年アメリカ大統領選挙の意味、特徴、争点
2. 10 月 1 日 黒崎真（本学英米語学科准教授）
オバマ大統領候補と「アメリカン・ドリーム」—キング牧師没後 40 年の米国
3. 10 月 8 日 柳沼孝一郎（本学スペイン語学科教授）
アメリカ社会におけるヒスパニック・パワー—大統領選挙とラテンアメリカ・ファクター
4. 10 月 15 日 興梠一郎（本学中国語学科教授）

アメリカ大統領選挙とアジア—中国からの視点

5. 10 月 22 日 木村昌人(〈財〉 渋沢栄一記念財団研究部長、本学非常勤講師)

アメリカ大統領選挙と日米関係

6. 10 月 29 日 鎌田信男(東洋学園大学現代経営学部教授、本学非常勤講師)
サブプライム、原油高、金融パニックとアメリカ大統領選挙
(高杉、飯島)

【国際人養成プロジェクト】

①愛好会 RISE の活動

RISE (ライズ) とは、自分の英語力をより高いところへ引き上げようと、各人がそれぞれの目標をもち、英語の自主的な学習に取り組む団体である。授業以外での学習の時間を増やし、留学・進学のための情報交換を行い、同じ目標やモチベーションを持つ学生同士が集まり、英語の力を向上させることが目的である。資格試験の模擬試験を独自に実施したり、英字新聞を読んで訳したり、個人の目標とは別に愛好会全体での目標を設定したりして、TOEFL や TOEIC、英検などの資格試験などの勉強も行っている。

現在は資格試験の勉強が中心であるが、次年度からはスピーチコンテストやリシテーション大会への参加、そして先生方や外部の講師を招き、講演会の実施に向けて鋭意計画中である。

②参加学生の現状

現在の会員数は 20 名で、4 年生が中心となっている。しかし今後新 1・2 年生を中心に会員を増やす予定である。学生の多くは海外留学や大学院進学

を希望しているが、TOEIC の点数を伸ばしたい、英語をもっと勉強したいなど様々な理由で参加している。特に 4 年生になって英語に触れる時間が少なくなった学生など意欲的に活動に参加し、英語力の維持・向上に努めている。1・2 年生はそのような意欲的な 4 年生から刺激を受けることで、より高い目標へ向けて互いに切磋琢磨して学習に励んでいる。

③今後の計画

・留学と進学

国内および海外の大学院への進学、また本学の協定校への留学などに申請できるよう資格試験（TOEFL、IELTS など）の勉強会も開催し、より多くの学生が留学・進学できるよう支援する。

・イベントの実施

定期的に講師の先生を招き、勉強の仕方について話を聞いたり講演をして頂く。また英語レシテーション大会やスピーチコンテストの実施、そして外部講師を招いて TOEFL・TOEIC の勉強会なども開催したい。

・学内組織との連携

RISE の活動について、英米語学科長・関屋康先生からも高い期待が寄せられており、英米語学科や ELI（English Language Institute）などの学内組織との連携を深めつつ、活動の幅を広げていきたい。

・会員の拡充

学内のやる気のある学生を中心に、呼びかけをする。但し、“誰でも”という姿勢ではなく、あくまで“やる気のある”学生に限定する。各学科の先生方から推薦された学生を中心に会員を拡充していきたい。また各学科の先

生方と連携して取り組んでゆく。さらには 2009 年度から開設される「通訳・翻訳課程」の学生にも参加を呼びかけ、会員を増やしていきたい。

④「国際人養成プロジェクト」の成果

2008 年 4 月の研究所開設時から「国際人養成プロジェクト」を立ち上げた。2008 年秋には、このプロジェクトは実働段階に入り、①学生の自立学習活動の支援（愛好会・ライズやユニオンなどの勉強会の立ち上げとその活動支援）、②外務省在外公館派遣員試験対策支援が実施されるようになった。

愛好会・ライズは、英語力を向上させたいという同じ目標を持った学生同士が教室の外でも英語を学び、互いに切磋琢磨して、それぞれの英語力を磨くための場を提供するために設立されたもので、参加者は週 2～3 回のペースで昼休みや授業終了後に勉強会を開催、着実に実力をつけた。2008 年度は 3 名の学生が英検準一級に合格し、参加者の TOEIC 平均スコアもかなり上がった。

この活動とは別に、地域研究や国際関係を研究するため海外留学や大学院進学を志す学生を中心にユニオンという勉強会も創設された。ユニオンでは、毎週 1 回、5～8 名の学生が教員を囲んで、*The Essentials of International Relations* という英文の専門書の輪読会を実施した。参加者は、専門書の読解力と討論能力の向上のみならず、国際関係の基礎的知識や概念を習得した。約半年にわたる勉強会の結果、筑波大学大学院人文社会科学研究所国際地域研究専攻博士前期課程に渡邊啓太郎君（本学スペイン語学科 2009 年卒）が、そして早稲田大学大学院政治学研究科政治学コース修士課程に加藤幹也君（本学韓国語学科 2010 年卒）が合格した。

尚、在外公館派遣員対策講座は、後述のように 2009 年度から実働段階に入った。

（大野、高杉）